

佐保台小学校 稲刈り・脱穀学習レポ

稲刈り、脱穀体験を通して

佐竹 樹之

日頃、我々大人だけが集い活動するフィールドに、小学生約30名が先生方と来て、にぎやかな雰囲気の中で、稲刈りや脱穀作業が始められた。体験学習の主旨や作業説明と注意点等が話され、いよいよ児童たちが田んぼに入り、まず鎌を使った手刈りが始まった。見ていると、



稲の株元を手で持ち、何回も鎌を動かしながら株を切りあぜに運んでいる子、

田んぼの中の昆虫に見とれて夢中になり手ががじっとしがちな子、足元のぬかるみに体の動きが奪われ右往左往している子等、様々な反応をしつつ皆で協力して稲を刈り



終えた。その後、株をひもで束ねる作業の時は、作業説明を聞き洩らしたのか、

うまく束ねられずに四苦八苦している子、ひもの最後の束ね方が分からずそのままにして置いて行く子らもいて、少々驚く場面があった。最近では日常生活の中で、ひもで物をくくったりする事が減ってきてできないのかと感じた。次に束ねた稲を竹で作った馬(干す台)に架けて干し、その日は無事終了した。

翌週は、干した稲をコンバインや足踏み式脱穀機やもみすり機で玄米にする作業を体験した。私が子供時代に使っていたような足踏み式脱穀機は、とても懐かしく当時を思い出しながら作業を試みたが、想像より難しく稲の動かし方

にも方法があり、奥が深いなとつくづく感心した。児童たちもコンバインや足踏み式脱穀機等で、次々ともみとわらができてゆくのを楽しくそうに体験していた。児童たちの中の一人が帰り際に「今日は楽しかった、ありがとうございました」と言ってくれ、世話をする一人として、児童たちが体験できてとてもうれしく思った。



近年「食育」という言葉がよく耳にするが人間は自分たちが生きてゆくために、他

の「命」を頂くことで、生き延びることができた。私たちが日常口にする食糧のほとんどのものは、生産する人がいて、流通に関わる人がいて、販売する人がいて、それら食糧で食事を作る人がいて、どの人が欠けても私たちは生きてゆくことが困難である。以前ある小学生が「じゃがいも」が枝になる絵を描いていたことがニュースになっていたが、実際にじゃがいもが生産される場に立ち会わないと分からない事である。そうした観点から、私たちが日頃食べている「お米」が、どんな所で育ちどんな方法で米粒になるのかを、自分自身の目で見ることは、正に「百聞は一見に如かず」で、とても大切な事だと痛感した。ましてや、近頃の児童たちの多くは、はだして土に触れることが少ないだろうし、このフィールドのような場所で遊ぶことも少ないであろうから、自然のエネルギーを直接自分の五感で体験し、その力強さや大きさを体全体で感じ取って欲しいなと思った。自然は優しくもあり、時には厳しい一面も持ち合わせているが、私たち人間は自然を征服するのではなく、自然にあわせつつ共存してゆく生き方を目指してゆかねばと思う。児童たちと短い時間ではあったが、共に時間を過ごす中で、改めて「自然と仲良く生きる」事の大切さを教えてもらった気がした。